171A.甘草瀉心湯

参考文献名		半夏	黄芩	乾姜	人参	甘草	大棗	黄連
傷寒論　太陽病下	注1	半升	3両	3両		4両	12枚	1両
金匱要略　百合病	注2	半升	3両	3両	3両	4両	12枚	1両
類聚方	注3	半升	3両	3両	3両	4両	12枚	1両
診療医典	注4	5	2.5	2.5	2.5	3.5	2.5	1
症候別治療	注5	5	2.5	2.5	2.5	3.5	2.5	1
処方解説	注6							
漢方あれこれ	注7	5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	1

注1　傷寒中風，医反下之，其人下利日数十行，穀不化，腹中雷鳴，心下痞鞕而満，乾嘔心煩，不得安，医見心下痞，謂病不尽，復下之，其痞益甚，此非結熱，但以胃中虚，客気上逆，故鞕也主之。

注2　蝕於上部，則声喝，一作嗄，甘草瀉心湯主之。

注3　半夏瀉心湯方内加甘草一両。

注4　心下痞硬，腹中雷鳴，下痢を目標として用いるが，裏急後重はなく，腹痛はあまり強くない。本方は半夏瀉心湯の証で腹中が雷鳴して不消化下痢を起こし，あるいは下痢せずに心煩して気分不隠を覚えるものを治する。胃腸炎，口内炎，神経症，夢遊病，不眠症などに用いられる。

注5　甘草瀉心湯は心下痞硬，腹中雷鳴，下痢というのを目標にして用いる方剤である。また下痢せずに，不眠があったり，口内が荒れたり，舌に潰瘍ができたりするものにも用いる。

注6　半夏瀉心湯方中，甘草の量を増したものであって，半夏瀉心湯の証で，腹中雷鳴して，不消化下痢を起こし，あるいは下痢はないが，心煩して気分すぐれず，不安を覚えるものを治すのである。

注7　不眠症：暑さで胃腸がくたびれてしまい，夢ばかりみて熟睡できないときは甘草瀉心湯を使う。

慢性胃カタル：胸がつかえ，おなかがグルグルと鳴り，下痢が止まらないときは甘草瀉心湯を用いる。

処方番号：171B　　**処方名**：生姜瀉心湯（しょうきょうしゃしんとう）

処方構成：
半夏 4-6、人参 2-3、黄芩 2-3、甘草 2-3、大棗 2-3、黄連 1、乾姜 1-2、
生姜 1-2（ヒネショウガを使用する場合 2-4）

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度で、みぞおちがつかえた感じがあり、はきけやげっぷを伴う次の諸症

効能・効果：
食欲不振、胸やけ、はきけ、嘔吐、下痢、胃腸炎、口臭

原典：傷寒論
出典：

解説：
半夏瀉心湯中の乾姜を減じ、生姜を加えた処方である。半夏瀉心湯を用いたような場合で、とくに胸やけ、げっぷが多いときに用いる。
本方の鑑別には半夏瀉心湯（171）の解説を参照のこと。生姜はヒネショウガを使用することが望ましい。

171B.生姜瀉心湯

参考文献名		半夏	黄芩	人参	甘草	炙甘草	大棗	黄連	乾姜	生姜	ひね生姜
処方分量集		5	2.5	2.5	2.5	−	2.5	1	1.5	2	−
診療の実際	注1	5	2.5	2.5	2.5	−	2.5	1	1.5	2	−
診療医典	注2	5	2.5	2.5	2.5	−	2.5	1	1.5	2	−
症候別治療	注3	5	2.5	2.5	2.5	−	2.5	1	1.25	2	−
処方解説		5	2.5	2.5	2.5	−	2.5	1	( )	( )	−
後世要方解説		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
漢方百話		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
応用の実際		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
明解処方		6	3	3	3	−	3	1	2	2	
漢方処方集		8	3	3	3	−	3	1	1	−	4
新選類聚方		5	3	3	−	3	3	1	1	4	−
漢方入門講座	注4	6	3	3	3	−	3	1	1	−	4
古方要方解説*	注5	3.6	1.8	1.8	1.8	−	1.8	0.6	0.6	2.4	−
漢方医学		5	2.5	2.5	2.5	−	2.5	1	1.5	2	−
精撰百八方		( )	( )	( )	( )	−	( )	( )	( )	( )	−
成人病の漢方療法		5	2.5	2.5	2.5	−	2.5	1	1.5	2	−
基礎と診療	注6	8	4	4	4	−	4	1	1	4	−

＊ 1回分量、通常1日2, 3回服用

注1　応用目標は半夏瀉心湯の證で，噯気・食臭を発し，腹中雷鳴・下痢するものである。噯気・食臭および腹中雷鳴・下痢は胃腸内で醗酵が盛んなためであって，これは生姜の治するところである。

注2　半夏瀉心湯証で噯気，食臭を発し，腹中雷鳴・下痢するものが本方の目標であるが，これらの症状は，胃腸内での醗酵が盛んなためである。しかし下痢がなくても，本方を用いてよい。本方も胃腸炎，醗酵性下痢，胃酸過多症，胃拡張などに用いる。

注3　生姜瀉心湯の腹証は半夏瀉心湯と同じであるが，噯気が多い場合に用いる。ことに食臭のある噯気が出て胃部が膨満して食欲のないときに用いる。

注4　心下部の痞える感じと緊張，噫気，腹鳴，下痢等を治す。

注5　故に方極附言にいわく「半夏瀉心湯証ニシテ，嘔吐スル者ヲ治ス」と。又，医聖方格にいわく「病人，心下痞シ，食臭ヲ噫シ，重キ者ハ嘔吐シ，脇下ニ水気有リ，腹中雷鳴シ，下痢スル者ハ，生薑瀉心湯之ヲ主ドル」と。この二説，能く本方の効用を約言せりというべし。

注6　胃病の薬。食欲がなく，みぞおちが痞え，むかつきや吐気があり，とくにげっぷの出る人で，舌の上が白く，腹が鳴り，下痢する人によい。下痢は醗酵性下痢（ガスをまじえた便）である。

処方番号：172　　**処方名**：半夏白朮天麻湯（はんげびゃくじゅつてんまとう）

処方構成：
半夏 3、白朮 1.5-3、陳皮 3、茯苓 3、麦芽 1.5-2、天麻 2、生姜 0.5-2（ヒネショウガを使用する場合 2-4）、神麹 1.5-2、黄耆 1.5、人参 1.5、沢瀉 1.5、黄柏 1.5、乾姜 0.5-1　（神麹のない場合も可）
（蒼朮 2-3 を加えても可）

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度以下から虚弱で、胃腸が弱く下肢が冷えるものの次の諸症

効能・効果：
頭痛、頭重、立ちくらみ、めまい、蓄膿症

原典：脾胃論
出典：万病回春

解説：
本方は古典に脾胃を補うと誌されているとおり、胃腸の消化機能を主治する六君子湯が基本となり、それを構成する人参、半夏、蒼朮、白朮、陳皮、茯苓はいずれも胃内の水滞を排除し、乾姜、生姜は胃腸内の寒冷をあたためてその働きをたかめる。さらに黄耆は皮下の水毒、麦芽、神麹は消化作用を助け、嘔吐を鎮める。黄柏と沢瀉は腎と膀胱の熱をさまし、水毒を尿路に導く。天麻は肝経に入り、風を主り、風に動揺して揺れるのを鎮める能があり、めまいを主治する。胃腸が弱くて、めまい、頭痛、嘔吐を伴うものに用いられるが、呉茱萸湯にも同じ証がある。その判別は呉茱萸湯は嘔気が激しく、煩躁、上衝があり、腹にやや力があり、水毒症状が激しいなどの特徴がある。

172.半夏白朮天麻湯

参考文献名		半夏	白朮	蒼朮	陳皮	茯苓	麦芽	天麻	生姜	神麹	黄耆	人参	沢瀉	黄柏	乾姜
診療の実際	注1	3	3		3	3	2	2	2	2	1.5	1.5	1.5	1	1
処方解説	注2	3	3	3	3	3	2	2	0.5	2	1.5	1.5	1.5	1	0.5
応用の実際	注3	3	3		3	3	1.5	2	2	2	1.5	1.5	1.5	1	1
明解処方	注4	3	3		3	3	2	2	1	2	1.5	1.5	1.5	1	1
基礎と診療	注5	3	1.5	2	3	2	3	2		1.5	2	2	2	1	1
漢方医学	注6	3	3	3	3	3	2	2	2	2	1.5	1.5	1.5	1	1
漢方あれこれ		3	3		3	3	2	2	2	2	1.5	1.5	1.5	1	1
治療の実際	注7	3	3		3	3	2	2	2	2	1.5	1.5	1.5	1	1
漢方精撰百八方		3	3	1.5	3	3	2	2	2	2	1.5	1.5	1.5	1	1
漢方の基礎と応用		3	3	−	3	3	1.5	2	−	2	1.5	1.5	1.5	1	1

注1 脾胃を補い，胃内停水を尿として導くのが目的。痰厥の頭痛を主治する。胃アトニー症等にて，貧血，栄養わるく，脉沈遅，眩暈，頭痛のあるもの。

注2 平素胃腸虚弱のもの，胃内停水があり，外感や精神的ショック，または食事の不摂生等によって，胃内の水毒が上逆し，頭痛と眩暈，嘔吐を発するものに用いる。

眩暈，頭痛，食後疲れて眠くなる者，常習性頭痛，常習性のめまい，低血圧者の頭痛とめまい，メニエール病，胃腸虚弱者の高血圧で頭痛，めまいする者，胃アトニー，胃下垂症，上顎洞化膿症などに応用される。

注3 胃が弱くて冷え症で，ことに手が冷える人か，しじゅう頭痛，頭重感，めまいを訴え，時には発作性の激しい頭痛がおこり，その際嘔吐を伴うもの。食欲がなく，しばしば嘔気があり，食事のあとで，手足がだるくなって眠くなるもの。

注4 頭痛，目眩，副鼻腔炎に応用。

注5 頭痛の薬，平素胃腸の虚弱な冷え症の人で，胃に水がたまり，これが水毒となって頭痛をおこしやすい人に用いるのであるから，頭痛と同時にめまいを伴い，鼻の根元から真直ぐ上に頭の頂上にかけて痛むことが多い。本方の病人は多く食後に手足がだるく，眠気を催してくる。低血圧の頭痛，胃腸性高血圧の頭痛にも用いる。

注6 胃腸が弱く，アトニーの傾向のあるもので，下肢の厥冷，めまい，頭痛，悪心などを主訴とするもの。食後の手足の倦怠とねむけを訴えるもの。胃アトニー症，胃下垂症，常習頭痛，メニエール症候群。

注7 頭痛とめまいを伴う肩こり，胃下垂，胃アトニー症。この頭痛は眉間のあたりから前額，頭頂部にかけて痛み，少し首を動かしてもめまいがひどく，からだが宙に浮いているように感じるもの。

処方番号：173　　**処方名**：白朮附子湯（びゃくじゅつぶしとう）

処方構成：
白朮 2-4、加工ブシ 0.3-1、甘草 1-2、生姜 0.5-1（ヒネショウガを用いる場合 1.5-3）、大棗 2-4

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度以下から虚弱で、手足が冷え、ときに頻尿があるものの次の諸症

効能・効果：
筋肉痛、関節リウマチ、神経痛、しびれ、めまい、感冒

原典：金匱要略
出典：

解説：
桂枝附子湯から桂枝を去り、白朮を加えた方剤である。陰証で虚証、水滞を伴う者が目標となる。
原典である『金匱要略』には「傷寒八九日。風湿相搏ち、身体疼煩、自ら転側する能わず、嘔せず、渇せず、脈浮虚にして濇のものは、桂枝附子湯之を主る。若し大便堅く、小便自利の者は去桂加白朮湯（白朮附子湯）之を主る。」と記されている。すなわち、急性感染症を契機として発症した、はげしい身体の痛み、精神不穏状態が見られ、寝返りも打てないほど症状が激しく、便秘し、小便が頻数、あるいは尿量減少が認められる者が適応となる。附子が配剤されていることから、四肢や身体の冷感、寒冷による症状の悪化がみられる場合に用いるとよい。
実際の臨床では、急性熱性疾患を契機としない関節痛や関節炎にも広く応用される。また、陰証で虚証、水滞を伴う感冒、めまい、しびれ、筋肉痛などにも用いられる。

173.白朮附子湯

参考文献名		白朮	朮	炮附子	附子	炙甘草	甘草	生姜	大棗	用法・用量
金匱要略入門	注1	2			0.5		1	1.5	4	*1
症候による漢方治療の実際(第5版)		3			0.5		2	3	3	*2
改訂新版漢方処方集	注2	4		0.3-1			2	3	3	
漢方入門講座1	注3	4			1		2	3	3	
新撰類聚方	注4	4両		3枚炮去皮破		2両炙		3両切	12枚	*3
新古方薬嚢	注5		2	0.3-0.4			1	1.5	2	*4
漢方処方大成	注6	4			1		2	3	3	

*1　水300粍を以て煮て100粍となし濾過し、30粍宛温服する。
*2　二四〇を以て煮て八〇に煮つめ三回に分服。
*3　水六升を以て煮て二升を取り、三回に分け温服する。
*4　水六勺を以て煮て二勺となし、滓を去り三回に分けて温服すべし。

注1

・一服して身体の感覚麻痺を覚える。半日許して再服し、三服を全部服用し尽くしたるとき、患者は瞑眩して昏睡状態に陥るが、之は附子と白朮との作用が現われて、潜在浮腫を駆逐せんとして、未だその道程にあるからで、怪むに足りない。

注2

・身体疼煩、大便硬く小便自利するもの、或いは風虚頭重、眩苦甚だしく、食味を知らぬものを目標とする。
・筋肉リユウマチ、神経痛、感冒、眼病、蓄膿症。

注3

・発熱、身体疼痛、便秘、尿量減少するものを治す。
・急性慢性関節筋肉リウマチ、神経痛、感冒、眩暈。

注4

・神経痛・リユウマチ・筋肉痛・麻痺などで脉浮虚又は沈弱小便自利の傾向あるもの。

注5

・身體が痛み寝返りも出来ぬ者にて小便近く大便秘する者。頭重くめまひして食進まない者。半身不自由な者。
・本方は平常冷性にて小便近き者に用ひて効あり。

処方番号：174　　**処方名**：白虎湯（びゃっことう）

処方構成：
知母 5、粳米 8、石膏 15、甘草 2

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度あるいはそれ以上で、熱感、口渇があるものの次の諸症

効能・効果：
のどの渇き、ほてり、皮膚のかゆみ

原典：傷寒論
出典：

解説：
白虎は中国の四方を守る四神獣の一つで、西方を守る金神である。漢方の四治療原則の発汗、吐、下、中和のうち熱病を寒涼薬で中和する意を西方は秋で解熱の意を含み、本方の主薬である石膏が白色であるので名づけたものといわれる代表的な漢方剤の一つである。したがって発熱し汗が出て煩渇する条件下の熱性病たとえばかぜ、日射病、熱射病、急性熱性伝染病、麻疹、皮膚炎、糖尿病、喘息、歯痛、眼疾、夜尿、精神病など広い応用領域があるが、陽証、表証があり、肌肉間の熱という条件を無視して病名だけで投与するときは危険で重篤な症状をおこすおそれがあるので、効能効果には一般薬としては病名は記されず、ただ症状を挙げるに止まっている。脉証も浮滑数又は洪大で、沈弦遲小などの脉証には禁忌である。症状として悪寒がなく、自覚的に身体に灼熱感があり暑苦しく、他覚的にも皮膚に触れると灼熱感やほてりがあるものに応用される。
白虎湯（174）・白虎加桂枝湯（174A）・白虎加人参湯（174B）は類縁の方剤である。白虎湯を中心に据えると、のぼせ感の強いものには白虎加桂枝湯を、熱感・口渇の強い場合は白虎加人参湯を用いる。

174.白虎湯

参考文献名		知母	粳米	石膏	甘草	用法・用量
診療の実際	注1	5	8	15	2	
診療医典	注2	5	8	15	2	
処方解説	注3	5	8	15	2	
応用の実際	注4	5	8	15	2	
漢方医学	注5	5	8	15	2	
古方要方解説	注6					
漢方入門講座	注7	6	10	16	2	
治療の実際	注8	5	8	15	2	

注1 身熱，悪熱，煩熱等と称する熱症状に用いて解熱せしむる効がある。この場合脉は浮滑数ないし洪大で口中乾燥，口渇がある。自覚的に身体灼熱感があって苦しく，通常悪寒を伴わず他覚的にも病人の皮膚に掌をあてると一種灼熱感があるものである。この熱状は感冒，肺炎，麻疹その他諸種の熱性伝染病に現われる。皮膚病の瘙痒感の甚しい場合に用いて効がある。

注2 解熱，鎮静，止渇の作用があり，身熱，悪熱，煩熱などの熱症状に用いる。

注3 発熱し汗が出て煩渇するものを目標とする。……口舌乾燥して大いに渇し，舌は乾いて白苔があり，自汗いでて尿利多く，ときに失禁し，体液枯燥の徴候がある。腹はそれほど充実せず，あるいは腹満を訴えることもある。応用(1) チフス，流感，麻疹，発疹性伝染病等で，高熱，口渇，煩燥し，あるいは譫妄，脳症を発したもの。(2) 日射病，熱射病，尿毒症で高熱，口渇，煩燥するもの。(3) 喘息で夏に発するもの。遺尿，夜尿，歯痛，眼疾患，糖尿病等。(4) 精神病で眼中火のごとく，大声，妄語，放歌，高笑，狂走，大渇引飲のもの。(5) 皮膚病一般，湿疹でかゆみ激しく，安眠できず，汗流れ出るもの，手を水の中に入れると痺れるというもの等。

注4 発熱して，口渇があって水をのみたがり，煩躁したり，反対に身体が重くてねがえりしにくくなり，自然に汗が出る。口，舌が乾燥して舌に白苔を生じ，食物の味がわからなくなる。また腹が張ったり，顔に垢がついてきたなくなったり，譫言や尿失禁をすることがある。

注5 湿疹でかゆみと口渇のひどいものによい。患部の乾いていることが多い。ときどき患部で火が燃えているように感ずる。またさむけのすることもある。夜尿症で口渇が強く，よく水をのみ，寝ぼけて尿の大量をもらすものによい。体格のがっちりした丈夫なものを目標とする。

注6 脉の浮滑なるは，たとえ時々悪風し，背微悪寒し，あるいは手足厥冷する徴ありといえどもその実は裏熱あることあり。

注7 熱症状は陽証の熱で肌肉間に熱あるもの。

注8 傷寒論厥陰病篇に「傷寒脈滑にして厥するものは，裏に熱あるなり。白虎湯之を主る。」とあって，熱が裏にこもって体表の冷える場合に用いられる。これを熱厥とよんでいる。この方を遺尿に用いることがある。傷寒論にも，熱があってうわごとを云って意識がはっきりせず遺尿をするものに用いている。白虎湯は口渇があって，尿の多く出るものに用いる。

処方番号：174A　　**処方名**：白虎加桂枝湯（びゃっこかけいしとう）

処方構成：
知母 5、粳米 8、石膏 15、甘草 2、桂枝 2-4

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度あるいはそれ以上で、熱感、口渇、のぼせがあるものの次の諸症

効能・効果：
のどの渇き、ほてり、皮膚のかゆみ

原典：金匱要略
出典：

解説：
白虎湯に桂枝を加えた方剤であるから、白虎湯に準じ、それより表証が強く、上衝の激しいものである。本方の効能効果は原方と同様に誌されているが、それよりのぼせがはげしいことに注意する必要がある。
諸熱性病で高熱があるもの、筋炎、骨膜炎、関節炎、湿疹、乾癬、ストロフルス、陰部掻痒症、頭痛、眼疾、歯痛などに応用される。また原方のように、日射病、糖尿病、夜尿症、蕁麻疹などの皮膚疾患にも適応する。
本方の鑑別については白虎湯（174）の解説を参照のこと。

174A.白虎加桂枝湯

参考文献名		知母	粳米	石膏	甘草	桂枝	用法・用量
診療の実際	注1	5	8	15	2	4	
診療医典		5	8	15	2	4	
処方解説	注2	5	8	15	2	3	
応用の実際	注3	5	8	15	2	4	
漢方入門講座	注4	6	10	16	2	3	
治療の実際(大塚)	注5	5	8	15	2	4	
改訂新版漢方処方集		6	9	16	2	3	

注1 丹毒の熱が強く，局所の灼熱感が著しいもの。

注2 白虎湯の証で，表証が強く，上衝の著しいものに用いる。諸熱性病で高熱のもの，筋炎，骨膜炎，関節炎，湿疹，乾癬，ストロフルス，陰部瘙痒症，眼疾患等に用いられる。白虎湯の原方よりは実際には白虎加桂枝湯，白虎加人参湯の方が頻繁に用いられる。

注3 白虎湯に準じ，表証が強く，上衝のはげしいものである。

注4 表証，上衝が著明で発熱，四肢疼煩する皮膚病。

注5 逆上し頭痛を伴う歯痛によい。この頭痛は脉が洪大で力があり，口渇を訴え，舌乾燥する。頭痛は下からつきあげてくるようなはげしいものである。頑固な湿疹や乾癬，黒皮症にも用いる。金匱要略の「温瘧はその脉平の如く，身に寒なく，ただ熱し，骨節疼煩し時に嘔す」とあり。皮膚病に用いるときは，身に寒くなくただ熱しというところに目をつけて応用する。

処方番号：174B　　**処方名**：白虎加人参湯（びゃっこかにんじんとう）

処方構成：
知母 5-6、石膏 15-16、甘草 2、粳米 8-10、人参 1.5-3

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度あるいはそれ以上で、熱感と口渇が強いものの次の諸症

効能・効果：
のどの渇き、ほてり、皮膚のかゆみ

原典：傷寒論、金匱要略
出典：

解説：
白虎湯に人参を加味した方剤であるから白虎湯証で内外の熱がはげしく、それよりさらに体液が欠乏して、煩渇や口舌の乾燥が甚だしく、水数升を飲み尽くさんとするような口渇と疲労の加わったものに用いるので、上気の効能効果があげられているが、適応病名や症状が削除されている。古来白虎湯（石膏剤）は漢方の四治療原則、汗、吐、下、和の１である和方中寒剤と以て、熱症を中和する重要な方剤で、日射病、熱射病、暑気あたり、糖尿病、皮膚炎その他多くの熱性病に頻用されている。
本方の鑑別については白虎湯（174）の解説を参照のこと。

174B.白虎加人参湯

参考文献名		知母	石膏	甘草	粳米	人参	用法・用量
診療の実際	注1	5	15	2	8	1.5	
処方解説	注2	5	15	2	10	3	
応用の実際	注3	5	15	2	8	3	
明解処方	注4	5	15	2	8	1.5	
基礎と診療	注5	6	16	2	9	3	
漢方入門講座	注6	6	16	2	20	3	
漢方医学	注7	5	15	2	8	2	
漢方あれこれ		5	15	2	8	1.5	

注1 白虎湯の証で体液の減少が高度で，口渇がはなはだしく脈洪大の者，精神錯乱して大声妄語，狂走，眼中充血，大渇乱飲の者。諸熱病の他に日射病，糖尿病の初期で未だはなはだしく衰弱しない者。

注2 脈は多くは洪大で，大便硬く，腹部は大体軟かで，心下痞硬し，表証としての汗出で，悪風，背寒，悪寒等があり，腹満，口辺の麻痺，四肢疼重，尿利頻数等のあるもの。本方は主として，(1)流感，腸チフス，肺炎，脳炎，中暑，熱射病等で高熱・煩渇・脳症を起こしたもの。(2)糖尿病，脳出血，バセドー病で煩渇し，脈の洪大のもの。(3)皮膚病のなかで，皮膚炎，蕁麻疹，湿疹，ストロフルス，乾癬等の瘙痒はなはだしく，患部が赤く充血し，乾燥性で煩渇を伴うものに応用される。腎炎，尿毒症，胆嚢炎，夜尿症，虹彩毛様体炎，角膜炎，歯槽膿漏等にも転用される。

注3 表裏の熱がはなはだしく，体液欠乏の徴候を呈して，口唇が乾燥し，煩渇して大いに水を飲みたがるもの。

注4 劇しい口渇（冷水を好む），口舌乾燥，自汗または尿量増大して，体液を喪失している，便秘なしを必須目標とし，また手足冷，食味を感じない，遺尿，譫語（うわ言），目眩，脈は滑脈または洪大脈を確認目標とする。日射病，夜尿症，糖尿病，蕁麻疹，湿疹に応用される。

注5 熱があって口が渇くときの薬。肺炎，日射病，糖尿病，瘙痒性皮膚病。

注6 煩渇脈洪大なもの。日射病，糖尿病，肺炎，発汗後の口渇。

注7 糖尿病，比較的初期で，体力もあり，血色もよく，口渇と多尿を主訴とするものに用いる。白虎湯や白虎加人参湯を与えてよい患者の舌には，厚い白苔がかかっていることはない。

苔があまりなくて，乾燥しているか，うすい白苔がかかって乾燥しているものが多い（大塚）。

処方番号：175　　**処方名**：伏竜肝湯（ぶくりゅうかんとう）

処方構成：
伏竜肝 4-10、ヒネショウガ 5-8（生姜を使用する場合 1.5-3）、半夏 5-8、茯苓 3-5

用法・用量：
湯

しばり：
体力に関わらず広く用いられる。

効能・効果：
つわり、悪心、嘔吐

原典：叢桂亭医事小言
出典：

解説：
嘔吐に本書中に五苓散、生姜瀉心湯、半夏瀉心湯、甘草瀉心湯、乾姜人参半夏丸、小半夏加茯苓湯、呉茱萸湯の諸方がある。頑固な嘔吐症にはとくに妊娠中の嘔吐（つわり）では、これらの諸方でも効果がないものがある。本方はこのような嘔吐症に適応する日本の経験方（折衷方）で、浅田宗伯が常用した薬方であり、小半夏加茯苓湯証でさらにむかつき、嘔吐のはげしい、炎症、血症のあるとき原方に伏竜肝（黄土）を加えたものである。伏竜肝は中国の黄土（北部中国の黄土地帯の酸化鉄を含んだ粘土）を加熱した漢薬で、わが国では赤土の粘土を加熱したものに相当するから、古来の漢方家はよく火が廻ったつまり使い古したかまどの土を賞用した。電化時代の今日ではこれを入手することが困難であるから、次善の策として調理に炒り器として使用するほうらく（かわらけ）をよく熱灼したものを使用する。煎じ方には先づ黄土を細かく破砕したものに水を加えて放置した上澄液をとり、その液で小半夏加茯苓湯（この項参照）の生薬を煎じて使用する方法と小半夏加茯苓湯の方剤中に黄土を 1 日量 10g 内外加えて同時に煎剤として使用する方法があるが（注 1～3 参照）、主薬の溶出量を考えると、前者の煎じ方がよい。服用法としては冷服し、何物も受けつけない頑固な嘔吐症には、1 回量を 1 時に服用することを避け、数回-十数回に分けて徐々に倍加して飲ませると、終には 1 回量を 1 時に飲めるようになり、逐時嘔吐症はおさまるものである。

175.伏竜肝湯

参考文献名		伏竜肝	半夏	生姜	茯苓	用法・用量
診療の実際	注1	4	6	6	5	*1
診療医典	注2	4	8	8	3	*2
処方解説	注3		8	5 乾生姜1.5	5	*3
実用療法	注4	10	6	6	5	*4
症候別治療		4	8	8	3	*5

*1 伏竜肝4gを器に入れ、水2合をもって十分攪拌し清水になるのを待ち、上澄水1合5勺を取り、これを以て小半夏加茯苓湯を煎じる

*2 伏竜肝4gを器に入れ、水600mlをもって十分攪拌し清水になるのを待ち、上澄水500mlを以て小半夏加茯苓湯を煎じる。又便宜上小半夏加茯苓湯に伏竜肝4gを加えて煎じてもよい

*3 小半夏加茯苓湯に伏竜肝を加えて煎用。または伏竜肝を水で溶き、その上澄液でこの小半夏加茯苓湯を煎じてのむとさらによいといわれている。

*4 小半夏加茯苓湯に伏竜肝を10g前後加えて煎じる

*5 伏竜肝4gに水400mlを加えよくかきまぜて静置しておき、その上澄液をとり、この水で小半夏加茯苓湯を煎じる。

注1 病勢烈しく，小半夏加茯苓湯で効なきつわりに用いる。

注2 他の処方で効果のない症状のはげしい妊娠悪阻に用いる。

注3 妊娠嘔吐のはげしいとき，伏竜肝(黄土すなわちかまどのやけ土)を加える。

注4 つわりに用い，小半夏加茯苓湯を使っても効果がない時。

処方番号：176　　**処方名**：茯苓飲（ぶくりょういん）

処方構成：
茯苓 5、白朮 4（蒼朮も可）、人参 3、生姜 1-1.5（ヒネショウガを使用する場合 3-4）、陳皮 3、枳実 1-2

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度あるいはそれ以下で、はきけや胸やけがあり尿量減少するものの次の諸症

効能・効果：
胃炎、神経性胃炎、胃腸虚弱、胸やけ

原典：金匱要略
出典：

解説：
人参湯から甘草を除き、陳皮（橘皮）、枳実、生姜を加えた処方である。又は橘皮枳実生姜湯（胃部痞えて嘔吐する者を治す処方）と四君子湯を合方した処方とも考えられる。溜飲（胃液を吐き出す人）のあるものに用いる。茯苓飲加半夏は本方より胸やけ、噯気の多いものに用いる。

176.茯苓飲

参考文献名		茯苓	朮	白朮	蒼朮	人参	御種人参	生姜	生姜(乾)	ひね生姜	陳皮	橘皮	枳実	用法・用量
処方分量集		5	4	−	−	3	−	3	−	−	−	3	1.5	
診療の実際		5	4	−	−	3	−	3	−	−	3	−	1.5	
診療医典	注1	5	4	−	−	3	−	3	−	−	3	−	1.5	
症候別治療	注2	5	4	−	−	3	−	3	−	−	3	−	1.5	
処方解説		5	−	4	−	3	−	−	1〜1.5	−	3	−	1〜1.5	
後世要方解説		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
漢方百話		5	4	−	−	3	−	3	−	−	−	3	1.5	
応用の実際		5	4	−	−	3	−	3	−	−	3	−	1.5	
明解処方	注3	5	−	−	4	3	−	1.5	−	−	−	3	1.5	
漢方処方集		3	−	3	−	3	−	4	−	−	−	2.5	2	
漢方入門講座	注4	3	−	3	−	−	3	−	−	4	−	2.5	2	
新選類聚方		3	−	3	−	3	−	4	−	−	−	2.5	2	
漢方医学		5	4	−	−	3	−	3	−	−	3	−	1.5	
精撰百八方	注5	5	−	4	−	3	−	3.5	−	−	−	3	2	
古方要方解説	注6	2.4	−	2.4	−	2.4	−	3.2	−	−	−	2	1.6	*
基礎と診療		3	−	3	−	3	−	4	−	−	−	2.5	2	
成人病の漢方療法		5	4	−	−	3	−	3	−	−	3	−	1.5	

＊ 1回分量　通常1日2, 3回服用

注1　胃内停水を去り，充満したガスを消す作用があるので，胃炎，胃下垂症，胃アトニー症，胃拡張などに用いられる。……胃にガスが充満して，そのために食べられないという病状を目標にして本方を用いる。噯気，悪心，胸やけを訴えることもある。腹証上では心下痞鞕があり，人参湯証よりもやや実証のものを目標とする。

注2　食欲がないというよりも，胃部にガスが充満して食べられない場合に用いる。ひどいときは，胸がいっぱいになって仰臥できないことすらある。四君子湯や六君子湯の証よりも腹力があって膨満している。噯気が出る。水が口に逆上してくる。このような場合にこの方を用いる。

注3　南涯「裏病なり。心胸間に痰飲あって，血気急する者を治す。その症に曰く，心胸間に停痰宿水あり，自ら水を吐出し，或は満して食す能わず，これ痰飲の症なり。曰く水を吐出する者は血気の急なり。その症，茯苓沢瀉湯に疑似して，少しく異なるは吐水して渇せず，心下満痛して腹中痛まざるなり」。

注4　尾台榕堂先生いわく「胃反呑酸嘈囃等，心下痞硬，小便不利し或は心胸痛むものを治す。又毎朝悪心し苦酸水或は痰沫を吐すものを治す。老人常に痰飲を苦しみ心下痞満，飲食消せず下利し易きものを治す。又小児乳食化せず吐下止まざるもの，並びに百日咳心下痞満し咳逆甚しき者を治す。倶に半夏を加えて殊効あり」（類聚方広義）

注5　心下部に停滞感があり，膨満感が強く，吐きやすい。それに，胸やけ，嘔気，食欲不振等の胃症状があるもの。

注6　故に方極にいわく「心下痞硬シテ悸シ，小便利セズ，胸満シテ自カラ宿水ヲ吐スル者ヲ治ス」と。この説，能く本方の効用を約言せりというべし。

処方番号：176A　　**処方名**：茯苓飲加半夏（ぶくりょういんかはんげ）

処方構成：
茯苓 5、白朮 4（蒼朮も可）、人参 3、生姜 1-1.5（ヒネショウガを使用する場合 3-4）、陳皮 3、枳実 1-2、半夏 4-5

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度あるいはそれ以下で、はきけや胸やけが強く、尿量減少するものの次の諸症

効能・効果：
胃炎、神経性胃炎、胃腸虚弱、胸やけ

原典：金匱要略
出典：類聚方広議

解説：
本方は茯苓飲（176）に半夏が加わったものである。従って、茯苓飲よりもはきけや胸やけが強い場合に用いる。

176A.茯苓飲加半夏

参考文献名	茯苓	朮	白朮	人参	生姜	乾生姜	陳皮	枳実	半夏	用法・用量
漢方あれこれ	5	4		3	3		3	1.5	4	
薬局製剤	5		4	3		1	3	1.5	4	

処方番号：176B　　**処方名**：茯苓飲合半夏厚朴湯（ぶくりょういんごうはんげこうぼくとう）

処方構成：
茯苓 5、白朮 4（蒼朮も可）、人参 3、生姜 1（ヒネショウガを使用する場合 3-4）、陳皮 3、枳実 1-2、半夏 5-6、厚朴 3、蘇葉 2

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度あるいはそれ以下で、気分がふさいで咽喉食道部に異物感があり、ときに動悸、めまい、嘔気、胸やけなどがあり、尿量減少するものの次の諸症

効能・効果：
不安神経症、神経性胃炎、つわり、胸やけ、胃炎、しわがれ声、のどのつかえ感

原典：本朝経験方
出典：

解説：
後世に板行されている『金匱要略』第 12 章、痰飲欬嗽の脈証と治療、第 1 項（水気の治療）の附方に、「心胸中に痰停宿水あり、自ら水を吐出して後、心胸の間虚して気満ちて食す能わざるを治す『外台秘方』の茯苓飲の証をあげ、茯苓、人参、白朮、枳実、橘皮、生姜の 6 味を水 6 合に煮て 1 合 8 勺を取り 3 回に分け、人が 5-6km 行く程度の時間をおいて温服させる」ことを述べている。
またその第 22 章、婦人雑病の脈症とその治療、第 2 項（婦人雑病と治療）に、半夏厚朴湯の証をあげ、「婦人の咽中に炙った肉がひっかかったような感じのものはこれを司る」と述べている。茯苓飲合半夏厚朴湯はこれら両者の合方である。